

3-10	
主題	事例検討会を行うことで統一したケアを提供することができ、認知症ケアが向上することについて
副題	利用者の生活に快を増やす為に

キーワード1	統一したケア	キーワード2	情報共有	研究期間	2ヶ月
--------	--------	--------	------	------	-----

法人名	練馬区社会福祉事業団		
事業所名	富士見台特別養護老人ホーム		
発表者：渡辺 太一	アドバイザー：熊倉 祐子		
共同研究者：海老根典子、櫻本淳、工藤加寿子、加地奈々美、松本正美、渡辺太一、重崎智美、杉山香菜子			

電話	03-5241-6010	FAX	03-5241-1760
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	緑の多い閑静な住宅街に位置する56床の従来型多床室の施設です。施設内には地域包括支援センター支所、通所介護事業を併設しています。近隣は練馬区内一番の高齢化地域です。施設は認知症になっても安心して暮らせる地域の核になれるよう、施設内が連携、協働しての運営に取り組んでいます。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

利用者の多くが認知症であり、認知症になってもその人らしくありのままの姿で過ごせるよう、認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式シートを活用、情報収集後にアセスメントしケアプランの作成を行っている。そのケアプランに基づき日々のケアやモニタリングを行っているが、職員同士の情報共有に課題があった。職員ごとに対応が異なり、利用者が安心して生活することが出来ず、周辺症状が出る頻度が多くなった利用者がいた。また、職員にとっての課題を利用者の課題と思っている職員も多くいた。

《2. 研究の目的ならびに仮説》

認知症ケアにおける職員の対応能力が向上することで、利用者の生活に快の部分が増加し、安心してその人らしくありのままの姿で暮らしていけるようになる。

その為には利用者の困りごとを明確にし、それを職員全員で共有し統一したケアを行なう事が必要と考え、取り組みを行なうことにした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

〈対象者〉
夜間帯の不眠や床のシミへの執着、ケア時の立腹等職員が上手くケアする事が出来ない利用者1名を対象とする。

〈取り組み期間〉
平成26年1月～平成26年3月

〈取り組み職員〉
中心職員は認知症ケア推進委員会（介護職員4名、看護師1名）、その他全介護職員、看護師

〈取り組み内容〉
①月1回の事例検討会を実施し、アドバイザーの助言のもと関わり方や支援方法を考え

る。

②検討会でケア方法を決定し、統一したケアが出来るよう記録や申し送り、掲示等で共有し実践する。

③事例検討会の1週間前と1週間後にアドバイザーが事例となる本人の状況把握、記録の確認を行ない実践状況等の助言を受け、課題解決について話し合い、実践することを繰り返し行なう。

《4. 取り組みの結果》

・夜間の不眠は本人にとっては不眠ではないことがわかり、目的を持って行動している事が分かった。また何の目的があって行動しているかがわかる、行動の特徴（サイン）を把握する事が出来た。目的に合わせたケアを行なうことで、本人が夜間落ち着いて過ごせるようになった。

・本人本位の視点を学べたことで、職員にとっての課題と本人の課題が必ずしもイコールではない事が理解できた。

・ケア方法を決定することで統一したケアが出来た。また、統一したケアを行なう為の情報共有の方法と大切さを学べた。

《5. 考察、まとめ》

上手くケアができない時、まずは利用者本位の視点を持つことが大切である。課題についてその原因や背景を見ると、実は利用者にとっては課題と感じていなかったり、過去の生活歴が影響していること等に気づくことが出来た。その気づきをケアに活かす事が、利用者の快の部分を増加させ、その人らしい暮らし方に繋がるということを実感した。また、職員も利用者にとっては生活環境の一部であると考えられる。職員ごとに異なる対応をする事で、周辺症状を悪化させ利用者の快の部分減らす結果になってしまう。利用者本位の課

題を明確にし、全体で統一したケアを行なう必要がある。統一したケアを行なう為には、全職員が実践できるようケア方法を具体的に決定し、共有していくことが大切である。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・ユマニチュード入門
本田 美和子、イヴ ジネスト、ロゼット マレスコッティ(著)
- ・三訂 認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式の使い方、活かし方
認知症介護研究・研修東京センター 編著
認知症介護研究・研修大府センター 編著
- ・PEPAにもとづく認知症ケアのための施設環境づくり実践マニュアル
児玉 桂子、古賀 誉章 編著

《8. 提案と発信》

認知症ケアをチームで考えることが、新しい発見やよりよいケアに繋がります。日頃の観察からの小さな気づきをチームで共有していくことが大切です。認知症ケアを難しいで終わらせず、チームで取り組んでいくことが結果、利用者にとっての快を増やすことに繋がると考えます。自分たちの施設だけでなく、様々な施設のケアを参考にしながら皆で利用者の快を増やしていけたら良いです。